

『Stand By Me ー日光照代・鈴代伝ー』

〈女3 または女2〉 一幕七場

上演時間50分

あらすじ

戦時中活躍した日光照代・愛子コンビ、そして戦後活躍した日光照代・鈴代コンビの半世紀わたる物語。戦時中、愛子はコンビを解消してほしいと照代に申し出る。大陸に慰問に行くと言っただが本場の目的は照代のかつての夫、冬木を追って行くためだった。照代は思いどまるように言うが、結局コンビを解消することを受け入れる。大陸に渡った愛子は被弾して死亡。戦後、照代を姉の仇と考える鈴代は、弟子入りするふりをして彼女に近づく。

上演記録

平成二六（2014）年度 山梨県高校演劇大会 地区大会参加

連絡先

t040125@yahoo.co.jp

はやおやんじ（砂澤雄一）

注意

作品内で行われる漫才は、秋田實氏の『防空戦』と『運と災難』を親族の方に許可を頂いた上で、加工し部分的に使用させて頂きました。ただし上演についてはその都度再度許可が必要かと思われまます。ご留意ください。

（出典『昭和の漫才台本』秋田實・藤田富美恵 文研出版 第二巻・五巻）



上野原高校演劇部 第一回定期公演上演作品

はやおとうじ作

Stand By Me

— 日光照代・鈴代伝 —

登場人物

日光照代：漫才師

昭和初年から漫才をやってきた。一九九五年現在七五歳

鈴代：漫才師 照代の相方であり、弟子。一九九五年現在六三歳

愛子：漫才師、鈴代の実姉。照代と組んでいたが、一九四一年に「わらわし隊」に参加して北支に慰問に出かけるも、被弾して死亡。

※ ※ ※ ※ ※

1 一九九五年 春

字幕 『1995年4月』

ある養護施設の庭。春の夕日が差し込んでいる。
舞台下手に車椅子に乗った照代が静かに佇んでいる。
舞台上手から鈴代登場。

鈴代、スプリングコート（下は見えない）革靴。かかとは高くない
照代、カーディングガンを羽織り膝掛けをして車椅子に乗っている。サンダル

鈴代 照代姉さん

照代全く反応せず、ただ景色を見ている。

鈴代 ……………

やっと思つた。…探したんだよ、姉さん。何も言わないで居なくなっちゃ
って。あれから何年たったか分かる？

照代相変わらず反応せず。

鈴代 テレビの話が来たの。NHKが戦後五〇周年記念番組で、戦前から現代までの
漫才を特集するんだって。それでね、姉さんと私にもう一度日光照代・鈴代で
漫才をしてほしいっていうの。

鈴代、照代に近づく。

鈴代

でも姉さん、テレビは嫌いだし、無理だつて先方に言ったのよ。でもね姉さん
いろんな方が、もう一度日光照代・鈴代を見たいって言ってくれてるらしいの。
それで私、じゃあ本人に聞いてみまうと言っちゃったから、もう大変。姉さん
とは一〇年以上も会ってないし、どこにいるのかも教えてくれないから、私必
死に探したんだよ。

鈴代、照代の肩に手を起き、しゃがみ込む

鈴代　今まで、どこで何をしたの。なぜ、私に何も言わないで出て言ったの。

鈴代、泣く
しかし、照代は相変わらず微動だにしない。

鈴代　でも、会えてよかった…

間

照代　ごめんよ…

鈴代　驚いて照代を見つめる

照代　許してね　：アイちゃん

鈴代、衝撃を受ける。照代がボケていることに気づいたからもあるが、照代の口から出た名前は自分の実の姉の名だったからである。

鈴代　照代姉さん？　すっかりしてよ。私よ、鈴代よ。あなたの相方で、弟子で、あなたをずっと憎んできた、鈴代だよ。見てよ。私を。何言ってるの。なにがアイちゃんよ。あんたと四〇年以上漫才やってきたんだよ。忘れたの。忘れないですよ。勝手にボケないですよ。今までどこで何してたの。

鈴代必死に訴えかけるうちにまた泣きだす。
照代が気がついたというように、ゆっくりと鈴代の方に向く。

照代　何泣いてるんだよ。お前は。いつまでたっても子供だね。お三味の稽古はすんだのかい。いいかい、都々逸の一つも歌えない漫才師なんぞ、みんな偽物さ。鈴代、いい加減泣くのを止め。

鈴代、驚いたように照代を見つめる。

照代　テレビだっていいじゃないか。いくよ、あたしは。あんたと漫才ができるならね。あの時みたいに死ぬ気でやろうじゃないの。

照代、にわかになんか歌う。

照代　信州信濃の新ソバよりも　わたしゃあんなのそばが良い

BGM入る。
鈴代、ただ呆されたように照代を見つめ続ける。

2　一九四一年五月　浅草

字幕　『1941年5月　浅草』

愛子、上着物、下モンペ　足袋に草履
照代、ブラウス（白）に下モンペ　足袋に草履

愛子　月というものも、季節季節でそれぞれ風情がありますね

照代　春は夜桜におぼろ月

愛子　夏は夕涼みの宵の三日月

照代 冬はコウコウと照る寒月

愛子 しかし、月々に月見る月は多けれど、月見る月はこの月の月、なんて言ってもやっぱり月は秋の名月に限りますね

照代 あなた、やっぱり名月がいいと思う？

愛子 それは、まったく、なんといっても月はお月見でしょう

照代 しかしですよ、あんまりいい月だと、非常時の折から私は困ると思う

愛子 といいますと？

照代 防空演習なんか、あなた月がお月見の月だったら、灯火管制しても見えてしまうでしょう

愛子 はあ、なるほど。でもその代わり敵の飛行機が飛んできても丸見えですわね

照代 これではお互いに具合が悪い

愛子 へんなこと言いなさんな

照代 第一、演習の妙味がない

愛子 まあ、そうですね

照代 そこで私、考えたんですが、先日も、日食だ月食だとやかましく言ってたでしょ

愛子 学者たちが熱心に研究しているそうですよ

照代 あれをなんとか利用してね

愛子 どうするんですか？

照代 本心に敵機が来るといときには、早速お昼なら日食、月夜なら月食にするようにできないかなと思ひましてね

愛子 できません、できません

照代 しかし、この間の防空演習ね

愛子 十日にわたる防空訓練

照代 勇ましかったね

愛子 実践に則した訓練ですからね

照代 まあ、私は、こういうことは小さな犠牲ですけどね

愛子 何が犠牲なの

照代 すっかり胃腸をやられましたね

愛子 ほお

照代 というのは、ちょうど晩御飯時でね、わたし防毒面かぶって

愛子 町内の防護団で働いているの？

照代 いや、ご飯炊いてるの

愛子 たいそうだね

照代 目に煙が入らないから本当に具合がいいのよ…、とにかくね、ご飯を炊いていたら非常管制のサイレンが鳴ったの

愛子 まあ

照代 すると、防護団の人が「火を消してください。火を消してください。」

愛子 ああ、そういつて回ってきますわね

照代 それで、私ね隣の奥さんと子供でバケツリレーしてね

愛子 ふんふん、それで

照代 カマドの火を消したのよ

愛子 ほお

照代 どうです。勇ましいでしょ。防空は何といっても家庭防空が第一ですから

愛子 でも、それじゃご飯が半煮えのままでしょうに

照代 だから、家中、お腹壊して困ってるんじゃないの

愛子 馬鹿馬鹿しい

照代 しかし、防空訓練徹底のためには、このぐらいの犠牲は我慢しないとね

愛子 火といっても、あなた、火が違うんですよ。明かりを消すの。明かりを外に漏れないようにすることなの

照代 そこのよ。あんまりカマドの火を消すのに夢中になって、電気消すの忘れてて、大変怒られました。

愛子 底抜けのバカですね

照代 でもね、実際に防護団の奮闘を見ていると頭が下がりますわ。

愛子 まったくね

照代 居ても立ってもいられませんでした

愛子 お互いさまでしょ

照代 居ても立ってもいられないから、家へ帰って寝てました

愛子 何もならないでしょ、それじゃ

照代 わけても、一〇月一日からの本訓練の勇ましさ

愛子 勇ましかったね

照代 ずいぶん爆弾落としたね

愛子 焼夷弾に毒ガス弾。無数に落としましたね。

照代 パアーと白い煙を吐いて落ちてきます。

愛子 防護団が走る

照代 爆音が聞こえるんでね、ふと上を見ると敵機の低空飛行ですよ
ビルディングの屋根すれすれに飛んでいる

愛子 ええ

照代 私もね、これが本当だったらと思うとじっとしてられなくてね。鉄砲を構えて狙いを定めた

愛子 なに、あなた鉄砲持ってたの？

照代 ああ、射的屋で景品落とすやつ

愛子 なんで射的屋の空気銃持ってるのよ

照代 すると敵機からね、私めがけてぱつと爆弾を投げつけてきた

愛子 あなためがけて？

照代 そうよ。敵もやっぱりさる者よ。同じ狙うんでも大物狙いだ。

愛子 そんなバカな

照代 私も癩に触った。何を！とばかり落ちてきた爆弾の石灰の袋をはっしと受け止めた。

愛子 手で？

照代 頭で

愛子 頭で！

照代 手出している暇がないから

愛子 それ、当たってるよ

照代 平たく言えばね

愛子 平たくもなにも…

照代 それがあなた毒ガス弾だったのよ

愛子 毒ガス弾！

照代 防護団の人が防毒面かぶって走ってきて、筒を道の真ん中に置いて火をつけた

愛子 黄色い煙がでるんでしょ

照代 「皆さん、戸を閉めて下さい。風上へ逃げてください。」

愛子 なるほど

照代 その献身的な活動ぶりを見てみると実際涙ぐましい。

愛子 まったくです

照代 私は目頭が熱くなってるね

愛子 それはそうでしょ

照代 もう涙がどうしても止まりません

愛子 うんうん

照代 しまいには、目も開けられないようになってね

愛子 ずいぶん感激したのね

照代 私あわてて風下に逃げたんで煙が目に入ったのよ

愛子 それを先に言いなさい

愛子・照代 失礼いたしました。

3 楽屋

字幕出す。衣裳はそのま

照代、たばこに火をつけようとしている。そこへ愛子が入ってくる。

愛子 照ちゃん

照代、振り返りながら

照代 お疲れさま

愛子 照ちゃん：

照代 どうしたのアイちゃん

愛子 相談があるの

照代 何よ改まって…、まあ、お座りなさいよ
妹さん、お元気？

愛子 鈴代のこと？元気にしてるわ。あなたが大好きみたい。自分も漫才師になりたいなんて言ってるの。あの子私より勘がいいから、もしかしたらうまくなるかも

照代 姉妹でやればいいじゃない。私が鈴代ちゃんに三味線の稽古をつけてあげるわ

間

照代 …

愛子 照ちゃん、私、「わらわし隊」に参加して、大陸に慰問に行こうかと思うの

照代 わらわし隊って、吉本の？

愛子 そう。

照代 一人で？

愛子 だから…相談だって言ったでしょ

照代 あなた、ピンで北支まで行って、一体何をするつもりなの

愛子 照ちゃん、最後まで私の話を聞いてほしいの

私が一人で何もできないことは私が一番知ってる。本当は、照ちゃんにも一緒に行つてもらつて、二人で漫才できればと思う。でも、照ちゃんを無理に連れて行けないし。

照代 ずいぶんと水臭いじゃない

愛子 照ちゃん。どうか察してほしいの

照代 察するって何を。アイちゃん、はつきり言つて。私は回りくどいことはダメなのよ。一緒に行きたいなら、そういつてくれればいいじゃない

間

愛子 冬木先生が向こうにいるの

間

照代 …ははは、なに？

愛子 照ちゃん、ごめんなさい。でも、私どうしても先生のところに行きたいのよ。

間

照代 アイちゃん。冬木が何をしてきたか知ってるでしょ

愛子 ええ。知ってる。知ってるわ。でも、どうしても私、行きたいの。でも、それを目的に大陸にわたるわけにいかないでしょ。だから、わらわし隊に入つて、それで

照代、遮るように

照代 そんなこと、誰かに聞かれたら、あなた大変なことになるわよ。だいたい、私だつていけないと思うわ。あなた、慰問ということがわかつてないのよ。…それに行けば会えるの？…あの人今どこでなにやってるの？

愛子 …

間

照代 アイちゃん。私との漫才はどうでもいいわけ。

愛子 そんなふうに言わないで。お願い。

照代 アイちゃん。冬木は私の夫だったのよ。

愛子 ごめんなさい

照代 どうして謝るの、アイちゃん！

愛子 ごめんなさい。先生が照ちゃんの旦那だったことは勿論知ってる。先生がいろんなところで、それはひどいことをして、批難を受けていることも知ってるの。

照代 だったら

愛子 今の私があるのは先生のおかげなの。恩があるの。この恩に私は報いたい。

照代 恩？はははは、面白いことを言うわね。あなたは恩のために大陸にわたるって言うの

愛子 照ちゃん、あなたは私と違って才能もあるし、それに、私よりずっと強い。だから

照代 だから？

愛子 私がいなくなっても、きっと私よりずっといい相手見つけて、もつともっと人気も出るわ

照代 バカなこといわないで！アイちゃん。あなた何を言っているのか分かってるの？

愛子 分かってはいるつもりよ。才能のない私は、照ちゃんのように強くはなれない。平凡に生きるしかないの。

照代 愛子！冬木と一緒にいることが平凡なこととお思いかい。だったら、あんたは大馬鹿だよ。

愛子 好きな人のそばにいたい。分かって、後生だから

照代 みすみす不幸になるのが分かっているのに、私が許す訳ないでしょ？

愛子 芸人の親を持って、こんな仕事をするのも運命みたいに思ってたけど、人には向き不向きがあるの。私は漫才師に向いてないの。照ちゃんの足を引っ張るばかりだし

間

照代 アイちゃん。あなた本当にそう思っているの。

間

照代 分かったわ。日光照代・愛子は今日でおしまいにしましょ。私があなたを破門したことになります。あなたが下手くそで、満足な芸ができなから、私があなたを切り捨てたという事にしましょ。そうすれば、あなたが失意のうち大陸にわたったってこともみんな納得するでしょう。でもね、アイちゃん。冬木のこととは

愛子、言葉を遮って

愛子 ありがとう。一生恩に着るわ。ありがとう。ごめんなさい。

愛子、照代に頭を下げて部屋を出て行く。

照代 ……

照代 たばこに火をつける。

BGM

4 一九四六年三月 浅草

(映像 終戦の様子↓闇市の様子) なくても可
音声 玉音放送↓リンゴの唄↓雑踏

字幕 『1946年3月 浅草』

鈴代 セーラー服にモンペ ブック靴風呂敷を抱えている カチューシャ
照代 白いブラウスに明るい色(レモン色やピンク色)のカーディガン、フレアスカ
イト ハイヒール
場所は焼け残った浅草の一角 雑踏が聞こえる

鈴代 照代姉さん…

照代、すぐには分かりかね、じつと顔を見る

照代 鈴代ちゃん？鈴代ちゃんじゃないの

鈴代 はい、お久しぶりです。

照代 無事だったのね。

鈴代 長野の方に疎開してました。

照代 そう、ちよつと見ないうちに随分大人になっちゃって。何歳になったの？

鈴代 十六です

照代 そう…もう立派な大人ね

鈴代 姉さん。今日はお願いがあって来たんです

照代 私に…？。私にできることなら相談に乗るわ

鈴代 私を弟子にして、姉さんの相方にしてください

照代 鈴代ちゃんが、漫才を？そういえば、いつかアイちゃんが言ってたわね。勘がいいんで上手くなるかもしれないって

鈴代 姉がそんなことを？

照代 ……アイちゃんには本当にかわいそうなことをしたわ。

鈴代 そのことは…

照代 鈴代ちゃん、あなたどうして漫才なんかしたいの？それも私なんかと

鈴代 ……それは……。姉が照代姉さんと漫才をしているのを見て、私もやってみたいと思っただけです

照代 それは、あなたが幼い頃の話よね

鈴代 ……

照代 戦争に負けて、世の中はこんな調子だもの。あなたのように若い人は、これから自由に好きなことをやればいいじゃないの

鈴代 ですから、漫才が、私の好きなことなんです…

照代 ……漫才だってなんだって、もう昔の演芸かもしれないよ。もっとモダンでお洒落なものを目指したら

鈴代 姉さんは本当に漫才が古い演芸だなんて思ってるんですか

照代 ……いいえ。私はそうは思っていないわ。ただ、あなたのような若い人にはもつと違う未来があるんじゃないのかと思うのよ

鈴代 私は漫才がやりたいんです。照代姉さんと…

間

照代 鈴代ちゃん。私にはあんたの言っていることは、信じられないんだよ。悪いわね。

鈴代 どういうことですか

照代　じゃあ、こっちから言うけど、あなたの懐に忍ばせているその刃物はどういう了見なんだい

鈴代、驚いて胸を抑える

照代　やっぱりね。まさかと思って言ってみただけ……

鈴代、ナイフを取り出して、へっぴり腰で震えながら構える

照代　そんなに震えてて、私を刺せるのかい？

鈴代　あなたが破門しなければ、お姉ちゃんは死なずにすんだ

照代　ああ、そうかもね

鈴代　あなたが、お姉ちゃんを殺したんだ

照代　ちよつと待ちなさいよ。私は確かにアイちゃんを破門したよ。でも、大陸に渡ったことや、ましてや敵の弾に当たって死んでしまったことまで責任は持てないね

鈴代　違う。あなたはお姉ちゃんが邪魔になったから、中国に行って弾に当たって死ねばいいと思っていたんだ。

照代　………

鈴代　お姉ちゃんの無念を思うと、あなたがのうのと生きてるのは許せない。殺してやる

照代　ああ、そうだろうね。私が憎いだろうね。いいよ、刺しなさい。あなたに殺されてやるよ。さあ……

鈴代、なかなか刺せずにいる。

照代　どうしたんだい。早くおし。あなた、私を殺すことだけを支えにこの戦争を生き延びてきたんだらう。遠慮はいらないよ、あなたに刺されて死ぬなら私は本望だ

鈴代、それでも刺せない

照代　なにしてんだい。あたしや、せっかちなんだよ。やるなら早くやっておくれ。

鈴代、刺せずにそこにへたり込む

照代　鈴代ちゃん。あなたは一つ間違っているよ。……漫才つてのはね、端から見やただ面白おかしく喋っているように見えるかもしれないが、これでも芸のうちなんだからね。そんなに簡単なものじゃない。漫才をバカにしちゃいけない。

鈴代　………

照代　いつでもあなたに殺されてやるから、その決心がつくまでは、私と一緒に漫才をやりな。本当にアイちゃんの仇をとりたいうなら、アイちゃんよりも、私よりも上手い漫才師になって、見返したらどうだい。

鈴代、泣き崩れる

照代　鈴代ちゃん、いつまで泣いていても、なんにも変わりやしないよ。あなたは今日から私の弟子で相方だ。日光照代・鈴代の誕生だよ。

鈴代　………

照代 鈴代、いい加減泣くのをお止め。わたしやね、泣き虫とらつきよが何よりも嫌いなんだよ。

BGM入る。

5 一九五四年五月

字幕

『戦後、焼け残った演芸場も映画館になるなど漫才師の活動の場は失われた。活動場所を求めて地方巡業に出る者も多かった。昭和二十二年にラジオで演芸番組が再開され、昭和二十八年にはテレビ放送も始まり、地方に散った漫才師たちは次第に大阪や東京に戻ってきた。そんな折、某放送局による第一回新人漫才コンクールが開催されることになり、照代・鈴代を奮い立たせた。』
1954年5月

照代、
鈴代、

照代 私、思うんですけどね。人間の運と災難というものは、どこにあるか分かりませんね。

鈴代 それは、そうですね

照代 あなたはどう？私はどっちかというといい方だけどね

鈴代 あなたは運がいいの？

照代 あなたは

鈴代 私は悪いわ

照代 ああ、悪いね。運も悪い、顔も悪い

鈴代 ほつというて

照代 同じ人間として生まれて、運のいいのと悪いのとでは大違いです

鈴代 大きな違いだね

照代 たとえばこうなるんです。運のいい私と運の悪いあなたが道を歩いていますわね

鈴代 仲よくね

照代 人込みにまぎれてわからなくなる。私はあなたを探し、あなたは私を探す。うろうろしている。そのうち運の悪いあなたが電車道に行く。

鈴代 交差点

照代 危ないところ

鈴代 そうですね

照代 それをあなたが慌て渡ろうとする。あやまってこける。そこへ大きなトラックがサシ、あなたは下でキヤーという。

鈴代 私、どうなったの？

照代 だから、あなたが電車を渡ろうとする、あやまってこける。そこへ大きなトラック

クがサー、あなたがキャー

鈴代 つまり私はトラックの下敷き

照代 そう、あなたが下でトラックが上

鈴代 うわぁ

照代 重たいよ、それでみんなで病院に連れて行く

鈴代 もちろんケガしてるんですよ

照代 大変なケガ！災難だね

鈴代 運が悪いんだね

照代 同じことでも私は全然違う

鈴代 あなたはどうなるの

照代 私もあなたを探して電車道に行く

鈴代 あなたもね

照代 「おかしいなあ、あの馬鹿はどこへ行ってしまったんだろう」

鈴代 馬鹿って…それはないでしょ

照代 これは、心の中でつぶやいてるの

鈴代 同じだよ

照代 私も渡ろうとして、あやまってこける

鈴代 あなたも転ぶわけだ

照代 そこへ車がサー、私がキャー

鈴代 えらそうに言ってたけど、結局あなたもトラックの下敷きじゃない

照代 だれがトラック？トラックはあなたでしょ

鈴代 私はトラック、あなたは何なのよ

照代 私はそんなガラの悪いものにはひかれません。新型の乗用車！

鈴代 なんなのそれ、なんでそんなに違うの？

照代 運のいい人はひかれるものも違う

鈴代 そんなバカな

照代 そのときそのその車から降りて来る青年

鈴代 青年とは

照代 乗用車の持ち主だ。いい服着てる

鈴代 それは、そうでしょ

照代 あなたみたいな月賦の服とは大違い
鈴代 それは、そうでしょ：ほつといて
照代 即金で買った服を着て、つかつかと私のもとに
鈴代 あなたのそばに
照代 「あつ、失礼しました。お嬢さん！お嬢さん、おケガはありませんか？」
鈴代 ちよつと待ちなさい
照代 うるさいな
鈴代 お嬢さんって誰？
照代 私
鈴代 どこがお嬢さんなのよ
照代 「お嬢さんおケガはありませんでしたか？」そのとき、私は振り向き、青年の顔を
見てびっくり
鈴代 なんでびっくり？
照代 ものすごくきれいな人
鈴代 きれい？その人が
照代 グリグリしたペック顔
鈴代 グレゴリーペックみたいないい男
照代 ペック顔でわたしの顔を見つめて、その青年は言う。「お嬢さん、あなたのおみ足
からお血が出ているではありませんか」
鈴代 お血って何？血でしょ、なんで「お」がつくの
照代 上流階級の言葉なの
鈴代 そんなバカな
照代 とにかく出ているじゃありませんか
鈴代 とにかくって
照代 「ぼくの車に乗ってください。ご一緒に病院へ参りましょう」
鈴代 それで
照代 「はい、分かりました」
鈴代 なに、気取ってんの。怒らなきゃダメでしょ
照代 誰に？
鈴代 誰って、そのペックさんに
照代 バカなこと言わないで

鈴代 え、怒らないの？

照代 怒りますか、こんないい男がわざわざひいてくれたのに、もったいなくて怒れますか

鈴代 えー怒らないの

照代 にこにこ笑って可愛い顔して

鈴代 何？

照代 「あら、ありがとうございます」

鈴代 ありがとうございます？

照代 「こんな足、どうでもいいんですよ」

鈴代 どうでもいいの？

照代 「それはいけません。どうか僕の車に乗ってください。一緒に病院へ参りましょ」
「でも、本当にいいんですよから」「そんなこと言わないで」「でも…」「でも本当にいいんですよ」「いえいえ、それはいけません」「まあ、お優しい方」

鈴代 いつまでやってるの

照代 うるさいな、人が楽しんでるのに

鈴代 やれやれ

照代 それが縁となって、その青年と私は恋に落ちる

鈴代 どこに落ちるって？

照代 マンホールに落ちるんじゃないよ、「恋」に落ちたのよ
そして、二人はめでたくゴールイン

鈴代 結婚しますか

照代 結婚するね。そしたら大変だ。私は大金持ちの若奥さん。大邸宅の奥さん。もう漫才はやらないね。

鈴代 漫才やめるの？

照代 金持ちの奥さんだよ、こんなバカなことはしません。世間が許しません

鈴代 バカなことって…で、漫才やめてどうするの

照代 女中をつれて漫才見に行くね

鈴代 見に行く？

照代 「まあ、漫才っておもしろいですわね、ホホホホ」

鈴代 なにそれ？

照代 それで、ある日のこと。若奥さんの私は縁側で猫のヒゲを抜きながら

鈴代 かわいそうでしょ

照代 何もすることないのよ。ふっと考えて、思い出した。

鈴代 何を思い出したの？

照代 あなたのこと

鈴代 私のこと？

照代 「そうだったわ、あの人もけをしたんだったわ」

鈴代 遅いわ

照代 早速、主人に相談する

鈴代 早くして

照代 主人は書齋にいる

鈴代 書齋？

照代 「あなたあ…」

鈴代 あなたあ？

照代 お金持ちの奥さんだから。「あなた、シカジカこういうわけですが、どうしたものでしょう」

鈴代 なるほど

照代 「それはかわいそうじゃないか、なんとかしてやりなさい」

鈴代 ちよっと待って、なんであなたは鼻の下を抑えてるの？

照代 ヒゲじゃないの

鈴代 旦那さん、ヒゲはやしてるの？

照代 当たり前でしょ、お金持ちはたいがいヒゲ生やしてるの。猫も旦那もヒゲはやしてるの。どっちが猫か旦那かわからない

鈴代 おいおい

照代 「それはかわいそうじゃないか、なんとかその猫…」

鈴代 猫じゃないでしょ

照代 「その人を助けてやりなさい。お金がいるだろう」

鈴代 そうそう、お金がいります

照代 「金はそこにあるだろう、たばこ銭の残りが」

鈴代 いくら？

照代 三十七万円

鈴代 ちよっと待ちなさい。たばこ銭の残りが三十七万円？

照代 これだから貧乏人にはいや。うちじゃそれくらいの手金、その辺にほったらかしてあるの

鈴代 そんなバカな

照代 「その捨てるような金を持って行ってあげなさい」

鈴代 うん

照代 「じゃあ、そういたしますわ。運転手さん、車の用意をして頂戴」「奥様、車の用意ができました」車に乗ってあなたの病院へ行く

鈴代 私は喜ぶわね

照代 なんであなたは喜ぶと思うの？

鈴代 なんで？

照代 あなた、もう病院を退院していかないのよ。せっかくお金持ってきてあげたのに
鈴代 えっ、退院しちゃっているの、いないの私？ あー、なんて運が悪いのかしら、私
って…

間

照代 どうしたの？

鈴代 姉さん…。

照代 …

鈴代 お姉ちゃんは運が悪くて弾に当たったのかしら

間

照代 鈴代、知ってるかい？チャンスというのはね、前にしか髪が生えてなくて、後ろは
ツルツルパゲらしい

鈴代 …？

照代 だから向かってきた時にその髪をつかまえないと取り逃がすって言うんだよ。
通りすぎた後じゃ、つかみ所がないんだね

鈴代 何が言いたいの、姉さん

照代 そんなことでも、やってみないとわからないってことさ。お前、やらないで後悔す
るのとやって後悔するのじゃ、どっちがいい？

鈴代 どっちもいや。後悔したくないもの

照代 ハハハ。あんたらしいね。アイちゃんはね、やらないで後悔するくらいなら、やっ
て後悔しようと思っただろうね。

鈴代 …？

照代 …。鈴代…。人間はみな死ぬ。これだけは平等さ。金持ちだろうが、貧乏人だろうが。
必ずいつかは死ぬ。全員死ぬんだから、運が良いも悪いもない。そう思いたいんだ
よ、私はね。そうじゃなきゃ死んでいった人たちにいつまでたっても許してもらえ
ないじゃないか。生きてること「運が良い」って言うんなら、生きてるものは死
んだものよりたくさん笑わなきゃいけない。そうしなきゃ、死んでいった人たちに
申し訳ないからね。だから、私は漫才しようと思うんだ。

鈴代 姉さん

照代 あんたが、あの日ナイフもって私のところになかったら、私は、もしかしたら漫才続けてなかったかもしない。あんたと組んだときにね、私はそう思ったんだよ。みんなが大笑いできる国にしないと、いけないってね。

鈴代 …

照代 ま、運が良いか悪いかといえば、あんたに会えた分、わたしや運が良かったかもね。もつとも、そのうちあんたに刺されるかもしれないけど

鈴代 やめてよ

照代 鈴代、コンクールまでもう日がないよ。

鈴代 絶対に優勝したい、私。

照代 もう一回頭からだ。間がおかしいところは今度は止めるからね。

鈴代 はい

照代 さしあたり日本で一番の漫才師になりましょう

鈴代 はい

BGM

6 病室

照代、前場と同じ衣裳
鈴代、布団に入っていて衣裳は見えない。前場と同じ。

病室

鈴代が寝ている。照代はその横でうたた寝をしている。

鈴代、目を覚ます。

鈴代 …照代姉さん…

照代 鈴代、気がついたのかい

鈴代 …照代姉さん、ここは…

照代 このお馬鹿、お前、どうしてあんな真似したんだよ

鈴代 ……

照代 でも、良かった、助かって…あんたが死んだら私は生きていられないと思ってたんだよ…この大馬鹿が、

鈴代 …私、生きてる

照代 コンクールで優勝できなかったくらいで、死ぬなんて。わたしやアイちゃんになんて謝ればいいんだい。

間

鈴代 愛子姉ちゃんに会ったの

間

照代 ……なんだったって

鈴代 ……きれいなところがあつてね、みんな楽しそうに私を見ていたの。だから、私もそこへ行くとしたら、愛子姉ちゃんがついて、お前はこつちに来ちゃダメだって言ったの…。そこで目が覚めた…

照代 ……

鈴代 ……姉さん、私、分かったわ。

照代 ……何が？

鈴代 ……姉さんがお姉ちゃんを破門したんじゃないってこと。

照代 ……

鈴代 ……姉さんは、そんなことできる人じゃない。理由はわからないけど、きつと愛子姉ちゃんが大陸に行きたくなつたのね。姉さんは、きつとかばつてくれたんだ

照代 ……

鈴代 ……ありがとう 姉さん

照代 立ち上がり、鈴代に背を向ける

照代 ……鈴代、お前は今までどおり私を憎んでいておくれ

鈴代 ……姉さん

照代 ……わたしやね、あんたが言うような良い人間じゃないんだ。お願いだから、私を許さないでおくれ。

鈴代 ……照れてるの？

照代 ……とにかくもう一回寝た方がいいよ。暫くは仕事のことは忘れて身体を労つて、いいね

鈴代 ……分かつた。ごめんなさい。姉さん。もう姉さんを悲しませるようなことはしないから。許して…。おやすみ

間

照代 ……照代、鈴代を見つめて立っているが次第に涙を流し始める。嗚咽を殺して泣く。鈴代は眠りについたらようだ。

照代 ……私を許さないでおくれ。お願いだから。憎み続けておくれ。

照代 ……ベッドから離れる

照代 ……お前が本当のことを知ったら、私を殺さずにはいられなくなる。だから、その前に私を殺しておくれ…

間

アイちゃん、ごめんよ。あんたも私を許してはくれないだろうね。冬木は、私やあんたや他の人を利用していたんだ。私は途中で気がついたんだよ。あの人は脚本家でもなんでもなかった。あの人がしたのは、もつともつと恐ろし

いことだったんだよ。帝大出て漫才の台本なんか書いて、変わった人だと思った。いつも冗談ばかり言つて、ちつともインテリぶらないんだけど、でもやっぱり学のない私なんかから見ると思わず先生といたくなるような雰囲気があった。でもね、私は知ってしまったんだ。あの男が、何をしてるのか。大方、あんたも大陸に出来ないかって甘い言葉で誘われたんだろう。何かを託されてそれを俺のところまで持つてきてくれとか言われてね。冬木にはあんたみたいにして手足になって働いてくれる女が何人かいた。もつとも誰も自分が利用されてるって思ってるんじゃないか。だって、どうしてだろ。私に利用されてるって思ってたんだ。それが、どんな気持ちからだったのか、自分でもわからないんだよ。でも…あんたのために思ってたんじゃないか。愛子。私は嫉妬していたのかもしれない。でなければ、あんたが冬木に捨てられるのを見たかったのかもしれない。

照代、顔を覆つて泣く。

鈴代 姉さん…

照代、とても驚いて鈴代を振り返る。

鈴代 …ごめんね

鈴代、寝息を立てている

照代

寝言なのかい。…鈴代、今が私を刺す時だよ…刺しておくれ…私には私が許せないんだ。

BGM

7 一九九五年 晩春

字幕

『翌年のコンクールで優勝した照代・鈴代は折からの演芸ブームにも乗り、一躍人気コンビとなる。しかし、テレビにはほとんど出演しなかったため、熱心な演芸ファンにだけ指示される通好みの存在となっていた。ある若手人気漫才師が「照代・鈴代」を尊敬していると語ったため注目が集まり、再び脚光を浴びたのである。テレビやCMにも出演し大御所として扱われるようになった。しかし、一九八三年、何の前触れもなく照代が失踪し、十二年の月日が流れた。』

1995年4月

再び場面は養護施設の庭。

鈴代、スプリングコート（下は見えない） 革靴。かかとは高くない
照代、カーデイガンを羽織り膝掛けをして車椅子に乗っている。サンダル

照代

それで何をやろうっていうの。

鈴代

それを相談に来たのよ。姉さんは何がしたい？

照代 あれだね。「防空戦」

鈴代 そんなネタあったけ

照代 もう随分昔だけどね、やっただろう。防空演習の話

鈴代 姉さん？

照代 モンペ履いてやったじゃないか。射的屋の空気銃で敵機を撃つ話だよ

鈴代、照代が惚けてしまっていることに改めて気づきショックを受ける。しかし、それを顔に出さないようにして続ける

鈴代 それは、戦時中のやつだよ。もう忘れちゃった。他にはないのかい。

照代 あれがいいね、わたしや。

鈴代 そうなの。

照代 やってみよう

鈴代 ここでかい
ち、ちよつと待って。私ははつきり覚えてないんだから。

照代 大丈夫。やってるうちに思い出すよ。身体が覚えているさ

照代、車椅子から立とうとする

鈴代 無理しないで。大丈夫？

照代 人を病人扱いしなさんな。

鈴代 座ったままでもいいじゃないか。

照代 何言ってるんだい。漫才は立ってやるんだ。違うかい。

鈴代 そうだけど。

照代 あんたからだよ。「月というものも、季節季節でそれぞれ風情がありますね」

鈴代 姉さん、本当にごめんさい。私、覚えてないんだよ

照代 じゃあ、空気銃のところは

鈴代 そこも

照代 やれば出てくるよ。何回やっと思ったと思ってるんだい。当時はあれしかやらせてくれなかったんだから。いやな時代だったね

鈴代 ……そうだったね

照代 いくよ。

照代、漫才に入る

照代 でもね、実際に防護団の奮闘を見ていると頭が下がりますわ

鈴代、戸惑いながらも合わせていく

鈴代 ……そうですね

照代 居ても立ってもいられませんでした

鈴代 ……まあ、そうですね

照代 居ても立ってもいられないから、家へ帰って寝てました

鈴代 何もならないでしょ、それじゃ

鈴代、少しづつ調子を揃んでいく

照代 わけても、一〇月一日からの本訓練の勇ましさ

鈴代 勇ましかったね

照代 ずいぶん爆弾落としたね

鈴代 落としましたね

照代 パーと白い煙を吐いて落ちてきます

鈴代 ……

照代 防護団が走る、だよ

鈴代 ああ、そうか。そうだったね。

照代 パーと白い煙を吐いて落ちてきます

鈴代 防護団が走る

照代 爆音が聞こえるんでね、ふと上を見ると敵機の低空飛行ですよ
ビルディングの屋根すれすれに飛んでいる

鈴代 ええ

照代 私もね、これが本当だったらと思うとじっとしてられなくてね。鉄砲を構えて狙いを定めた

鈴代 なに、あなた鉄砲持ってたの？

照代 ああ、射的屋で景品落とすやつ

鈴代 なんで射的屋の空気銃持ってるのよ

照代 すると敵機からね、私めがけてぱつと爆弾を投げつけてきた

鈴代 あなためがけて？

照代 そうよ。敵もやっぱりさる者よ。同じ狙うんでも大物狙いだ。

鈴代 まさか

照代 私も癪に触った。何を！とばかり落ちてきた爆弾の石灰の袋をはっしと受け止めた。

鈴代 手で？

照代 頭で

鈴代 頭で！

照代 手出している暇がないから

鈴代 それ、当たってるよ

照代 平たく言えばね

鈴代 平たくって…

照代 それがあなた毒ガス弾だったのよ

鈴代 毒ガス弾！

照代 防護団の人が防毒面かぶって走ってきて、筒を道の真ん中に置いて火をつけた

鈴代 煙がでるんでしょ

照代 「皆さん、戸を閉めて下さい。風上へ逃げてください。」

鈴代 なるほど

照代 その献身的な活動ぶりを見ていると実際涙ぐましい。

鈴代 まったくです

照代 私は目頭が熱くなってるね

照代、本当に泣き始める

BGM

鈴代もつられて泣き始める

鈴代 それはそうでしょ

照代 もう涙がどうしても止まりません

鈴代 うんうん

照代 しまいには、目も開けられないようになってね

鈴代 ずいぶん感激したのね

照代 私あわてて風下に逃げたんで煙が目に入ったのよ

鈴代 それを先に言いなさい

鈴代、照代を抱きしめる。
照代、何度も謝る。

了

2014.8.15 六十九年目の終戦の日に

作品内で行われる漫才は、秋田實氏の『防空戦』と『運と災難』を親族の方に許可を頂いた上で、加工し部分的に使用させて頂きました。
(出典『昭和の漫才台本』秋田實・藤田富美恵 文研出版 第二巻・五巻)